

岩手大学大学院連合農学研究科

修了生の感想



修了生（学位取得者）の感想

課程修了

A氏（岩手大学）2010年3月修了

今からさかのぼりますが、私が高校時代に思い描いていたのは、生命について調べてみたい、そしてその生命の仕組みを利用して何か有用なものは得られないかなということでした。入学当初の岩手大学では農業生命科学科から更に4つの講座に分かれたため、進路について十分考える機会があり、生命現象について学びながらその応用が私たちの健康に結びつけることができる農業生命科学科食品健康科学講座を選択しました。また、深く専門性を身に着けていきたいと考え、岩手大学大学院で修士課程、博士課程へと進みました。

私が所属する研究室では、ケミカルバイオロジー（化学生物学）という研究領域で、生命現象の解明に取り組んでいます。それは化学（バイオプローブ、生理活性物質）を利用して生命現象（生物学）を解明する学問なのですが、そのバイオプローブは生命を理解するための道具になるだけではなく、それを応用することで医薬品や機能性を有する食品の開発につなげることができます。それはまさに、上述しました自分の理想と一致していました。一つの研究を成し遂げることはとても大変ですがそれだけ挑戦していけますし、自分がおもしろいと感じたことを深く学ぶために博士課程に進学したことはとても良かったと思います。

B氏（帯広畜産大学）2010年3月修了

この度、岩手連大の社会人入学制度を利用し、4年間の履修期間を経て、博士（農学）を授与頂くことになりました。

私は、子供のころ、研究者にあこがれる少年でした。また、雪と農業に興味を持っていました。学生時にお世話になった信州大学農学部では、雪氷学を専門とする教授の指導のもと、「中央アルプスにおける雪崩予報の可能性に関する研究」に取り組みました。指導教官からは、社会人になっても大学にいける機会はあることをお教え頂きました。社会人になってからは、職務を遂行するために覚えることが多く、いつしか時が流れて行きました。

機が熟したのは2005年、学生時代に雪氷学会でご挨拶した帯広畜産大学のT教授に、博士取得への思いを吐露してからです。その後、帯広畜産大学T教授をご紹介頂き、2006年4月に岩手連大に入学させて頂きました。

博士論文執筆に際し、データが全くなかった私にとって幸運だったのは、所属研究室で冬期気象を長期間実施しており、そのデータを使用させて頂いたこと、現地観測等で学生の支援を頂いたことです。修了に際しご指導いただきました先生方、研究室の学生各位には心より御礼申し上げます。

先生方や学生の皆様の多大なるご支援を頂いたことで、博士取得への希望を灯し続けることができました。今は、学位を得た喜びよりも、その重みを大きく感じております。今後は、学位に泥を塗らないよう、更なる精進をさせて頂く所存です。

C氏（岩手大学）2010年3月修了

これから、学位取得を目指す皆様へ

私は2010年3月に学位を取得しました。研究の内容は農村集落の維持・活性化に寄与する集落住民のネットワークを社会ネットワーク分析という手法によりに解明するというものです。

私の場合は、社会ネットワーク分析という手法に出会い、自分の研究に取り入れられる程度に物にするまで1年以上、その後、調査計画から大よその調査の完了までに1年弱、そしてデータ分析や論文執筆に2年弱と、計4年を要しました。

もっと勤勉な学生であれば、より早く学位取得が可能だったと思いますが、なかなか思ったようにはなりません。私のように農学部にあって社会科学系の研究室には博士課程の学生が所属している方が稀です。身近に先輩や同分野の同級生がいないことは、知的な刺激を得られない以上に、心的な面で大変、辛いものでした。主指導教員や研究室の後輩には、とてもお世話になりましたが気軽に話し合いが可能で、刺激し合えるような存在が必要なのだと心底思いました。社会人の方や研究に没頭出来るエネルギーがある方と違い、私のようにアルバイトで食い繋ぎながら就職への不安を抱えている学生にとって、研究は上手くいかない、論文も進まないという時期は自分の心のコントロールが困難でした。

気軽に立ち寄れる異分野の研究室があったり、他の研究機関に就職した先輩研究員がいたり、私的な勉強会などで同様の思いをしている人と出会ったり、1人で閉じこもらないで、なにかしらの方法で相談出来る相手を見付けることが重要なのだと思います。

私のような半人前でも、一応は学位取得が出来たというのは、周りの支えて下さった方々のおかげなので、皆さんも1人では無理だ、というときは周りを頼ってみてください。もちろん、ご自身が博士課程の学生なので、頼られることの方が多いとは思いますが。

3年間で学位取得出来るように、頑張ってください。

D氏（岩手大学）2010年9月修了

私は、農業土木技術者としてコンサルティング業務に関わっています。

大学時代は、河道に形成される砂礫堆について、基礎的な実験を行い実河川での河床変動について研究を行いました。

現職に就いてからは、農業用水利施設の機能診断を中心に、その診断方法及び対策について検討及び現地での検証を重ね、一定の方針を見出してきました。

しかし、堆砂及び洗掘等の災害を受ける河川構造物を多く見かけるにも係らず、原因解明とその対策工法については、未解明な部分が多いと感じられました。

そのような折に、農業農村工学会の全国大会でM教授と再会することができ、ご相談をさせて頂くうちに、学生時代に何かやり残した事や現時点での課題を研究として明らかにしていく事の必要性を痛烈に感じました。

入学に際しては、実験を主とした研究であること大学まで遠距離なこと仕事との両立ができるかなどの不安がありましたが、教授のご指導と周囲の理解により入学できました。

在学中は、仕事との両立が難しく私の立場として仕事を第1に考えざるを得ません。

このため、論文執筆もまとまった時間を確保することができず、思ったとおりの行程では進まないため、主指導教官のM教授にはすいぶんご迷惑をお掛け致しました。

また、水理実験は研究室の学生の皆さんの応援を得て、取り組んできました。

現地頭首工での事例収集では、多くの方と触れ合うことができ、貴重なご意見を頂くこともできました。

今回、“博士”という学位を受けさせて頂くことができましたが、研究を行なうにあたり、これらの多くの方々のご協力によることを考えると、“博士”という学位の重みとともに、本研究成果を活用した農業用水利施設の長寿命化に向けた、新たな取り組みが必要であると感じております。

E氏（岩手大学）2011年3月修了

「お前も岩手大学に來い。盛岡はなかなかいいところだぞ。」10年前、進路を決めかねていた私に岩手大学の受験を決心させたのは当時岩大の3年生だった兄の一言でした。その後、岩大に進学するからには研究テーマの兄弟リレーを達成してやろうと決意した私は、兄が取り組んでいた研究テーマを引き継ぎ、岩手連大へと進学した兄の指導を受けながら（ときには夜通し朝まで議論しながら）、勉学と研究に勤しみました。私は兄に続いて岩手連大へ進学しましたが、幼少の頃より博士号の取得を目標の1つにしてきた私にとって、修士まで取り組んできた研究を継続したいという自らの意志に加えて、同じ研究室の先輩でもある兄が岩手連大で学んでいる姿が、進学先の選択に良い影響を与えたことは事実です。今、岩手連大発の（初の？）兄弟博士が誕生しようとしています。所属した大学から研究テーマに至るまで、これほどまでに兄弟揃ってという例は極めて希だと思えます。

学位を取得するまでには、誰もが少なからず行き詰まったり辛酸をなめたりすることがあるでしょう。私も何度か大きな壁に当たりましたが、周囲の助言なくしてそれらを乗り越えることはできなかつたと思えます。当たり前のことですが、何事も独りで思い悩むのではなく、多くの人と話すことと「ヨクミキキシワカリ」の大切さを、岩手大学に入学してからの10年間を振り返って痛感しています。

F氏（弘前大学）2011年3月修了

学部生の時から日本に来て、弘前大学に入りました。最初の頃、博士課程まで進学しようと思わなかつたです。しかし、勉強すればするほど、自分の知識が全然足りないことに実感しました。そして修士課程が修了後、連大に入り、そのまま弘前大学に残り、蔬菜・花卉研究室から植物病理研究室に移りました。リンゴ葉圏に生息する真菌・細菌・ウィロイド類の網羅的検定する方法の開発についての研究を行ってきました。ドクターから専門を変えるのは、大変苦勞しました。なんでも一から学びながら進むので、実験がうまくいかないことがたくさんありました。指導の先生はいつも熱心に教えてくれたお陰で、なんとかいろいろな困難を乗り越えて、学位を取れました。私にとって、一番大変なことまた一番嬉しいことは、去年の8月に赤ちゃんが生まれました。生まれる前の3日まで、実験室で試験をしました。みんなに「ゆっ

くり休んだ方がいいですよ」と心配そうに言われましたが、実験が終わらせないと、結果を出さないといけません、3月に修了したいとずっと自分に言い聞かせて、頑張りました。子供が生まれる前に投稿論文が受理されて、とても嬉しかったです。休学せずに学位が取れて、本当に良かったです。努力すればきっとそのうちいい事があると信じて、これからも頑張っていきたいと思います。

G氏（山形大学）2011年3月修了

社会人学生であった私は、短期大学の助手をしながらの研究生活でした。職場から配属大学までは車で2時間以上かかるということもあり、思うように研究が進まないことが最も辛いことでした。しかし、研究する過程においてたくさんの方と出会い、様々な事を学ぶことが出来たことは、私の一生の宝物だと思います。

学位論文をまとめるにあたって、苦労も多くしましたが、たくさんの方と出会い、多くを学んだことが、今後の研究にきっと良い影響を及ぼすと思っています。研究は自分との戦いという面もありますが、それを解決してくれるのは、自分の努力とやはり人です。今後も、人との出会いを大切にしながら、少しでも多くの人に貢献できる研究を行っていききたいと思っています。

H氏（弘前大学）2011年3月修了

連大のカリキュラムで大変有意義だったのは異分野の講義と科学コミュニケーションであった。この科目は私の興味を充分満たしてくれたばかりか、研究視角を整理する上で貴重な機会であった。

振り返れば博士課程3年は長いようで極めて短い。たった千日である。院生の特権はこの千日を自由に使う事が出来ることであろう。また、自由な時間と共に自由な発想を許容し、支援し、導いていただいた岩手連合大学院の先生方に心から感謝している。

I氏（岩手大学）2011年9月修了

私は、水環境コンサルタントとして、20数年間、JICA等で途上国の調査・計画の仕事に携わってきた。今まで、訪問した国は、27カ国、とくにブラジルは多く、22回を数える。

これらの国で外国技術者と一緒に仕事に従事し、最も負い目を感じたのは、技術者としての資格である。とくに途上国で評価される資格は、唯一ドクターである。

惨めなのは、日本では、技術者の資格として評価されている「技術士(Professional Engineer)」も、日本を一步出れば、通用しない。

最近、海外との標準化資格として APEC Engineer もあるがこの資格を評価する国は極めて少ない。やはり、評価される資格はドクターである。

私は、定年後、ドクター取得に挑戦し、なんとか資格を取ることが出来た。

今後、ドクターの資格を持って海外業務に当たることが楽しみである。

若い人は、是非、早いうちにドクターを取得して、グローバルスタンダードの技術資格を身につけ、これからの業務(世界)に挑んで頂きたい。

J氏（弘前大学）2012年3月修了

・入学の動機

大学を卒業して青森県職員として採用されてから、リンゴ栽培の試験研究に携わって数年が経とうとしていました。もともと研究職を志望していましたが、自らの将来像は漠然としたままでした。そんな折、つくば市の果樹研究所での研修の際、きめ細やかなご指導のお陰もあって、幸運にも良い研究結果を得ることができました。後にこの成果をまとめた論文を海外雑誌に掲載することができました。このことがきっかけとなり、研究の道を歩む決意がより強くなりました。職場の上司の勧めもあり、研究者として独り立ちするためには学位取得という壁を乗り越える必要があると考えるようになりました。リンゴの主産地である地元弘前大学ではリンゴを対象とした研究が盛んなことから、岩手大学大学院連合農学研究科で学ぶことを決心しました。

仕事の内容がそのまま研究対象であり、職場での理解もあって、在学中は研究に集中することができました。期間内に論文をまとめなければならないプレッシャーに追い込まれ、焦燥感と孤独感に苛まれる日々もありましたが、それを乗り越えられたことは大きな自信となりました。もちろん、先生方の温かいご指導があつてこそ成し遂げられたことは言うまでもありません。私にとって学位取得は人生の試練であり、研究者としての出発点となりました。今後も精進を続け、地元産業の発展に貢献したいと思います。

K氏（帯広畜産大学）2012年3月修了

日本の酪農産業をもっと発展させたいという想いを胸に、これまでの研究をさらに追究していきたい、と考えたことが私の博士課程への志望動機です。岩手連大は、私が修士課程まで取り組んできた乳牛の育種改良に関する研究を行える環境が整っていることが本学を選んだ大きな理由です。

所属する研究室や指導教官によって違うと思いますが、私の場合は研究室内に博士課程の学生が私一人であったこともあり、かなり自由に研究を進めることが可能な環境にありました。思い返せば、同様の立場の博士課程の学生が周囲にほとんどいなかったことは、研究の議論を行う上で足りない部分であったと思います。しかしその分、先生たちとはマンツーマンで指導していただいたこともあり、密度の濃い研究生活を送ることができました。その点に関して、自分は恵まれた環境を与えていただいたと大変感謝しています。

L氏（山形大学）2013年3月修了

私は社会人学生として岩手大学大学院連合農学研究科に入学しましたが、各種講義において自分の専門とは異なる分野の講義を受講する機会や、科学コミュニケーションにおいて他の大学院生と専門を越えて自由に意見交換する機会が得られたことが良い経験になりました。大学院入学前は、いつも自分の研究ばかりに視点が集中し、視野が狭くなりがちでした。様々な分野の研究者とコミュニケーションを取ることによって、自分の研究分野における既存の考え方にとらわれない新しい発想や今後の研究のヒントを得るなど、これからの研究活動の参考になりました。

M氏（岩手大学）2013年3月修了

学生と教員と事務職員の三者の連携がよく、特に学生が直面する個別のケースについて事務職員にメール、電話等できめ細やかな対応をしていただけたことです。基本的に対応が柔軟かつ迅速であったため、研究や各種手続きをスムーズに進めることができました。これは修士過程まで関わってきた別の部署での事務対応とは大きく異なっており、連合大学院ならではの良い雰囲気であったと思います。遠隔システムを利用して国内の各連合大学院の教員の講義を受講できるような科目があり、研究中心の博士課程学生には、いい意味で息抜きになりました。

N氏（山形大学）2013年3月修了

連合大学であることから、他大学の同じ博士課程の学生と交流できる場が多かったことが良かったと思います。また、サスカチュワン大学へのインターンシップ経験や、震災被災地でのワークショップなど、現場へ（外へ）出る機会が多かったのも非常に良い経験になりました。

O氏（弘前大学）2013年3月修了

複数の人に向け、話をしたり教えたりする機会がこれまでになかったので、講義“教育研究指導”で、自ら講義をすることができたことは、とてもいい経験となった。

P氏（山形大学）2013年3月修了

親身になって質問に答えてくれる教授や事務の方がたくさんいらっしゃったこと。

Q氏（山形大学）2013年3月修了

修了予定者の公開審査会や中間報告等を1年次のうちに聴講するよう促すことで、発表者の意識改善にもつながると考えられる。また年を経るごとに発表者のプレゼンが改善していくことが予想される。

科学コミュニケーション等の機会に学位論文の書き方や申請の仕方について、修了生から説明してもらおう機会を設けて欲しい。

R氏（弘前大学）2013年3月修了

岩手連大があることで、私自身の研究の関係上、東北地方を対象としたこれまでのフィールドから離れることなく研究を続けることができたことは、調査を行う関係でも、対象者との関係を保つのも良い環境であった。また、連大独特の雰囲気だと思うが、配属大学以外の先生方と自身の研究内容について話し合いをする機会が必然的にあるというのは、良い事だと思った。修士までは指導教員も副指導教員も自大学のみ先生方で構成されており、情報の共有化は図りやすかったものの、その分敢えて研究内容の説明を行うということは少ないように思われる。しかし、構成大学内で他大学の先生に副指導教員や学位審査員をお願いするにあたって、研究内容の共有化を図るために自分自身の行っている研究内容をしっかりと見つめ、説明し、理解してもらい、そのうえで助言を受けるといった流れが必要であるため、説明能力の向上を図

るという点で技術の向上を図るいい機会であった。また、それとともに、やはり多角的な視点からの助言を頂く機会に恵まれているという点で、連大で学んだことは大きかったと思う。

苦手とする私には苦痛な時間でもあったのですが、既存の『科学英語』の講義を応用させた日本人向けの講義が必要ではないかと思う。科学英語を受けている中で、留学生が多い岩手連大では、私のように英語に苦手意識を感じながらも必要性を感じて受講している人は正直ついていけなかった。当時の教員に配慮を頂いたため、どうにか最後まで受講していたが、そうでなければコミュニケーションが取りづらく、またそれぞれ英語能力に差があるため聞き取るのが精一杯で終わってしまう。また、講義終了時には、どうにか英語が耳に馴染んで、何を言っているのか理解をできるようになってきていても、やはり使わなければ忘れてしまうというのは大きいと思う。そして、対話、英語による説明といった国際学会に参加することを視野に入れての講義であると思うが、それとともに英文要旨の書き方といったものも講義としてあると効率的に勉強できるように思われた。

S 氏（岩手大学） 2013年3月修了

サスカチュワン大学における研究インターンシップで、自身の専門分野の最先端の研究に触れると共に英語圏での生活に自信を得たこと。そのためにも岩手連大に気楽な英会話のコミュニティがあるとよと感じた。来年からサスカチュワン大学において研究を行うことを視野に入れている。

T 氏（弘前大学） 2013年3月修了

専門的な情報へのアプローチ、そしてそれにより得られた知識は、研究のみならず様々な場面で役立つことが分かりました。また科学コミュニケーションを始めとする様々なカリキュラムによって他の構成大学の他分野を研究する学生や教官と交流を持つことができ、広い視野およびつながりを得られました。この事は、連合大学院ならではの貴重な経験だったと感じております。

U 氏（岩手大学） 2013年3月修了

岩手連大の構成大学の間で国内留学し、いろいろな研究分野の先生や学生と交流できることはよかったですと思います。

連大に入学前、自分の研究以外のことをあまり関心がなかった。連大で先進な機器分析方法、DNA 組み換え技術の勉強などいろいろな知識に接触し、勉強した。先生方の話を聞き、研究に対する認識が変わった。自分の研究以外はなにも分からないと、研究者になれないことを認識した。これから、もっと幅広い範囲の知識を勉強し、努力したいと考えている。

V 氏（岩手大学） 2013年3月修了

社会人入学のシステムがあり、仕事をしながら学位を取得できたこと
複数人の指導教官に指導いただく制度があり、専門外などの分野からの視点を得られたこと
農学特別講義など、専門分野が分かれているので授業の内容がかけ離れているものが多かつ

た。

提案として、例えば共通のテーマを授業課題とし、各分野の先生方がその課題に貢献できる方法と可能性などを、基礎と活用方法を踏まえて説明する等の形式が良いかと思います。細かな基礎研究の内容を聞くことより、その技術をどのように活用するのかなどのテクニックや可能性を解釈できると、大きな課題を通じて自分の研究を発展させる応用力が身に付くと考えます。先生方の課題がかけ離れている場合は、前半、後半などと課題を複数に増やすことも良いと思います。

W氏（弘前大学）2013年3月修了

勉強と研究の良い環境が作られました。岩手連大の生物についての研究のレベルが高く、また大学の先生方は豊富な知識を持ち、研究に対する姿勢が真剣で、その優れた知識を持つ先生方のもとに、努力することで、必ず多くの専門的知識と技術を身につけることができます。

学生に対して、授業料は大きな負担になっています。けれども、連大から授業料の免除を頂き、大きな援助されました。さらに、留学生に対して、様々な奨学金も申請ができ、勉強と研究に専心できます。

指導先生から様々な論文を書くことを教えていただきましたが、たくさんの先生の経験を聞きたく、参考になると思います。このような講義があれば、いいと思います。

Memories of Iwate Bendai

